

# 麦類

## 赤かび病

### 発生の動向

- 1 令和6年は、6月上旬の巡回調査では、発生圃場率は0.0%（平年0.3%）で、発生量は少なかった（図1）。
- 2 近年、赤かび病抵抗性「やや弱」の品種（ゆきちから）が広く作付けされている。

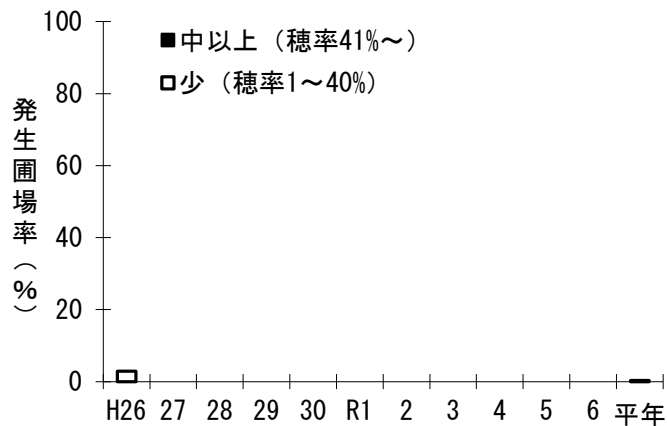


図1 赤かび病の発生圃場率の年次推移

### 防除対策

農産物検査における赤かび粒の混入限度は0.0%、厚生労働省が定めたデオキシニバレノール（赤かび病の病原菌が産生するかび毒。以下、「DON」という。）の基準値は小麦について1.0mg/kgとされており、徹底した防除が必要な病害である。

- 1 赤かび病菌は、開花した穂に感染するため、開花期を始めた時期から開花期の薬剤防除が最も効果的である。圃場毎に生育状況を把握し、**確実に適期に防除**する。
- 2 令和4年産岩手県産麦でDON基準値超過が発生したことから、令和7年度は再発防止を徹底するために、**全ての品種で赤かび病防除を適期に2回以上行うこと**。  
具体的には、開花始期（開花を始めた時期）～開花期に1回目の防除を、その7日～10日後に2回目の防除を実施する。曇雨天が続く場合には、さらに7～10日後に追加防除（3回目）を実施する。なお、3回目防除を実施する場合は収穫前日数に注意する。
- 3 使用する農薬は、赤かび病に適用がある農薬のうち、赤かび粒発生抑制及びDON含有濃度を低減する効果が高い農薬を選択する。
- 4 成熟する前で穂が緑色の時期は罹病穂を識別しやすいので、この時期に抜き穂を行い、赤かび粒の混入を回避する。
- 5 刈り遅れにより降雨に当たると、赤かび病の進展やDONの産生を助長する原因となるため、**適期（子実水分30%以下）になり次第、速やかに収穫**する。赤かび病が発生した部分、雑草が繁茂した部分などは刈分けを行い、良質な小麦への混入を避ける。
- 6 収穫後、適切な水分まで乾燥する間に、赤かび病菌が増殖し、DONが産生される可能性があるため、可能な限り速やかに乾燥機に張り込み、循環型乾燥機で目標子実水分12.5%まで乾燥する。また、粒厚選別と比重選別を併用し、被害粒を除去する。